尾上誠蔵氏ITU-T局長当選
―全権委員会議2022を振り返って―

前 総務省　総務審議官　佐々木（ささき）　祐二（ゆうじ）

国連の中でも最も古い機関であるITUは、事務総局長、次長に加え、無線通信局（R局）、電気通信標準化局（T局）、電気通信開発局（D局）のトップが選挙で選ばれる。本部はスイスのジュネーブにあり、193の国・地域が加盟している。

日本のITUへの貢献は非常に高く評価されており、分担金では1984年以降、最大の拠出国であり、30単位の拠出をしている。また、1959年以来、理事国に継続的に選出されており、T局においても多くのSGの議長、副議長を出している。2022年5月のWSISフォーラムにおいて、日本のこれまでの貢献に対する感謝状の授与があったほか、同年6月にルワンダのキガリで開催されたWTDCでは、ジャオ前総局長から、参加した川角靖彦氏の50年にわたるITUでの活動に触れ、日本の長きにわたる高い貢献についてスピーチでの紹介があった。

一方、選挙職については1999年から2006年、郵政省出身の内海善雄氏が事務総局長を務めたが、RRB委員を除くと、選挙職はそれ以来出ていない。

日本人が国連機関のトップに就く例は非常に少ない中で、情報通信分野を担うITUへの注目度は非常に高まっている。トップの事務総局長の候補者ではないものの、グローバルなテーマとなっている経済安全保障の観点から国際標準化は特に重要度が増している。

ITUでは各国1票の投票権を持つので、小国を含め世界の1国1国への浸透が特に重要であった。T局長に立候補した尾上誠蔵氏は、これまで民間標準機関の中での活動が非常に高く評価されていた。よく言われるとおり、選挙はどぶ板である。そして選挙は川上からとも言われるが、小国を後回しにしないことが重要だ。尾上候補の能力・実績、人柄などをアピールするとともに、コロナ禍において、日本は丁寧に相手国に寄り添って問題意識を丁寧に聴取し、ITUとして今後すべきこと、さらに日本として力になれると考えられることなどについて意見交換を行った。接触の機会が少ない小国と対話できたことは、総務省にとっても貴重であった。

今回の選挙では、現職R局長のマリオ・マニエウィッツ氏には対抗する候補者が出なかったため、実質4ポストの選挙となった。

事務総局長では、1期D局長を務めたドリーン・ボグダン・マーティン氏が立候補し、アメリカ対ロシアになった。

事務総局次長については、リトアニアのトーマス・ラマナウスカス候補、現職T局長である韓国のチェイサブ・リー候補と、サモアのニサ・バーセル候補となった。ラマナウスカス候補は、以前D局で勤務し、ボグダン候補の部下だったことがある。

T局長については、早くから立候補を表明していたチュニジアのビレル・ジャムシ候補は8年前の選挙でもT局長に立候補して、リー現T局長と争った結果負けたが、T局の活動はすべてこの人がキーマンとなっていたと言われていた。

日本の尾上氏は2022年9月に立候補したが、その後を追うようにドイツのトーマス・ツィルケ氏が立候補した。ツィルケ氏はドイツの行政機関で標準化を担当してきた人で、ニューヨークの国連本部でも勤務したことがある。

D局については候補者乱立の様相を呈し、アフリカから3名、ジンバブエのザバザバ氏、ガンビアのカー氏、カメルーンのウントコ氏が最初に立候補を表明、そのあとコンゴのキサンゴー氏、パキスタンのカーン氏、それから立候補の締め切り直前にバハマのビュロー氏が立候補した。

さて、T局長の選挙活動についてだが、ITUの様々な会合の場で尾上候補をアピールした。尾上候補の登壇や、総務大臣をはじめ総務省からのスピーチの機会を確保するとともにバイ会談をできる限り多く行った。数多くのレセプションなどのソーシャルイベントにも顔を出して、とにかく挨拶をして、握手して名前を売るという活動をした。

具体的には、コロナ禍のため2022年2月ごろまではオンラインでの会談が中心だったが、多くの国の大臣、高官と会談をすることができた。その後、ITUの大規模会議参加等の機会を利用して対面での会談を行った。実際に対面で会って話をすると、尾上候補の人柄も含めてオンラインのときよりもよく伝えられ、非常に効果があった。

各国に訴求する際の施策としては、「ONOE Commitment」を一貫してアピールしたことが非常に有効だった。選挙で交換した名刺の裏にQRコードを入れており、そこから尾上氏の選挙用ページでコミットメントや動画をスマホで見てもらえるようにした。

■ONOE Commitment

「ONOE Commitment」の中で強調したものに「新たなエコシステムの創設」がある。外部の民間機関との連携は尾上氏の強みであり、標準化は、その成果を世界に広げて使ってもらわないと意味がない。そのためのアウトリーチの努力を、様々な機関と連携しながら行うことを強調している。これまで標準化は途上国が関心を持って参画しにくい分野だったが、標準化の役割についての尾上候補の考え方への賛同をいただけたものと思う。また、選挙活動を通じて、これまでの日本の途上国に対する様々な支援の実績が、大きな財産になっていることを感じた。

また、尾上氏は経歴的に産業界出身で、技術、標準化実務を熟知している。そこで、技術の標準は産業界から提案されるものであることを強調した。特筆されるのは移動通信の標準化で、尾上氏が第1世代のアナログの時代から5Gまで深く関わり、その中心で活躍してきたことだ。

これらを繰り返し強調した結果として、選挙の後半戦では「ONOE Commitmentはよく知ってるよ、LTEの父だよね。」と、お声掛けをいただくことも増えた。

2022年9月～10月の全権委員会議（PP-22）では、9月29日に総局長選挙と次長選挙、30日に局長選挙が行われた。昼夜に開かれた多くのレセプションを分担して参加し尾上氏の支持要請を行い、結果を情報共有し、さらに最後の追込みを行った。

29日の総局長の選挙では予想どおりアメリカのボグダン候補が勝った。注目を集めたのは次長選挙だったが、ふたを開けてみるとリトアニアのラマナウスカス候補がダブルスコアに近い大差で勝った。

30日のT局長選挙では、90票以上を取れば過半数になるところ、尾上候補は93票を獲得できた。薄氷の勝利であるが、1回の投票で当選することができた。過去に1回目にトップを取っても、2回目以降にひっくり返されたこともあるため、1回で決まったことは大変幸いだった。

一方、D局の選挙はとてももつれたものとなった。ルールに従って6時間空けて2回目、さらに緊急動議が認められ同日に3回目の投票まで行われた。最後はバハマ対ジンバブエになって、ジンバブエのザバザバ候補が勝った。

尾上氏は2023年1月にT局長に着任し、ここが4年間のスタートとなる。

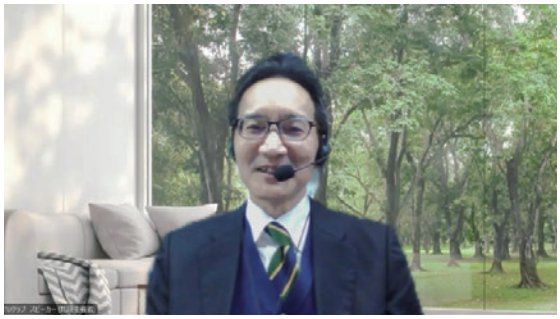
今回のITUでの選挙においては、官邸、外務省、総務省と政府が一体となり、また、候補者を出したNTTはもちろん、それ以外の日本の各企業とともに全力で取り組んだ結果として、最終的に尾上候補が当選することができた。まさに日本全体として勝利を勝ち取れた。

本日は時間の都合で、総務省としての取組みを中心に紹介しました。引き続き今後ともITUの活動にご支援をお願いします。ご清聴どうもありがとうございました。

※本記事は、2022年12月13日開催の第51回ITUクラブ総会での講演をリライトしたものです。

（責任編集：日本ITU協会）

ITUクラブでは、続いて、スピーカーの佐々木前総務審議官と聞き手の山川日本ITU協会理事長による質疑応答で、以下を紹介いただいた。



■佐々木前総務審議官

■山川日本ITU協会理事長

・選挙活動の前半はオンライン会議での活動が多くなったが、選挙までの時間は限られるため、関係者総がかりで取り組んだこと、また、コロナ禍の中で飛行機を乗り継いでの各国訪問は難しい面があったが、対面によるバイ会談の効果の大きさを感じられたことなどが紹介された。
・また、ルーマニアでの全権委員会議における選挙直前の2022年9月28日に開催された日本レセプション開催の模様が紹介された。
・選挙活動においては1国1国に寄り添って話を聞き、聞きっぱなしにせずにできるだけ応えていき、その結果を積み上げることが大切であること、日本がこれまで実施してきた人材育成活動などを継続することの重要性や日本の技術力を基にした支援などを継続していくことの大切さへの言及もあった。

■ITU全権委員会議会場（ルーマニア「国民の館」）

■日本レセプション会場

■和傘を舞台脇に配置

■尾上氏によるプレゼンテーション

■場の雰囲気を盛り上げた和楽器の演奏